多言語間対照言語行動研究に関する一考察

研究班２「言語事象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」国語研究所グループ

Ｉ．研究担当者それぞれの４年間

西原　鈴子

はじめに

新プロ第２班国語研グループの調査研究は、今年度で４年次を終える。日本国内外における面接調査は最終段階を迎えており、当初の計画に従って分析も始まっている。第２班に与えられたテーマ「言語事象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」について、理論的研究を東京大学駒場グループが担当し、実証的研究を国語研究所グループが担当してきた。国語研究所グループは、これまでに研究所に蓄積されてきた言語行動に関する調査研究を参考にしつつ、国際社会における日本語の実態を把握するという新プログラムの総合的課題にそって、新たな研究方法を開発・確立する仕事に取り組んで来たことになる。平成１０年度で終了するこのプロジェクトの最終報告を執筆する前に、調査に従事した研究者の現段階における感想を記録しておくことは、調査方法の自己評価とともに、分析の観点の調整という意味でも必要なことであると考える。

与えられた課題の一つは、言語行動の多言語間対照研究ということである。国語研究所が従前行ってきた調査では、調査地点となった国内の地域の言語社会における成員の言語行動のあり方を、社会生活の場面に即して聞き出していくという調査方法が採られてきた。その分析の際に変数となったのは、その地域社会の成員が持つ個人的要因（世代・年齢・性別・生活歴・仕事など）であった。その方法論的蓄積を生かし、異言語・異文化体験における言語接触を踏まえた対照研究をいかに行うかが、出発点で研究グループに与えられた大きな課題であった。それを打開する方法として選んだのが、ヴィデオ刺激による面接調査であった。

日本語を第一言語とする人々（日本人）が、海外に駐在員として赴任する機会は、近年急増している。同様に、日本語を第二言語として学習した人々（外国人）が近年多数来日しており、日本国内で日本人と一緒に仕事をしている。異言語・異文化社会に暮らすことは、自分が培ってきた言語文化社会における規範のあり方を意識化する良い機会である。調査設計の段階では、そのような局面にスポットライトを当て、被験者として海外在住の日本人および日本国内在住の外国人を選んで、異言語・異文化社会に暮らす彼らがどのような「身の処し方」意識を持っているか、彼ら自身の言語文化的背景を異言語異文化接触の中でどのように意識しているかを、身近な生活場面の中で捉えていくことを第一の目標として設定した。

研究担当者は９名である。この研究プロジェクトに参加することにした共通の動機は、日本語の言語行動を複眼的に視ること、とくに日本語とその他の言語話者が相互に接触する際のありさまを社会言語学的に研究することであったが、それぞれの研究的背景も研究的関心も同一ではない。協力して得たデータの利用方法も多岐に及ぶことが最初から予想できた。多様な分析的関心に耐えるような均一のデータ収集を保証するような調査方法として、共通の刺激による実験的調査を選んだ。結果は少なくとも複数の言語文化的背景を持つ被験者が日本及び日本人の言語生活をキーにして反応する実験データであることが保証されると考えたからである。以下に、調査に当たって問題となったことを若干記しておきたい。

ヴィデオ刺激のあり方

選ばれたのは６場面である。海外在住の日本語話者（日本人）と日本在住の英語・フランス語・ポルトガル語・朝鮮語・ヴェトナム語話者を対象とする調査の場合、場面をどこに設定するか、場面に登場する人物を誰にするかは、調査結果に直接影響を与える重要な選択であった。結論としては、場面設定も登場人物も日本と日本人ということにした。研究テーマから言っても、日本と日本人を共通の刺激にすることが調査に一貫性を持たせるファクターになるという結論を得たからである。そこには一種の「開き直り」も存在したことは認めざるを得ない。

人間を相手に実験的調査をする場合、他の条件を一定にしてある特定の点についてのみ調査をするという「実験」の前提条件を厳密に守ることは難しい。それぞれの個人がすでに多様な背景を持っている存在であるから、同じものを視ても知覚はそれぞれの経験の蓄積を反映するものでしかあり得ない。それを踏まえた上で、あえてヴィデオ場面を選んだのは、口頭による場面の説明が被験者のアタマの中に描き出す映像の多様性に悩むよりは、誰もが同じ場面を視たということを土台にする方が、データのばらつきが少ないと考えたからである。

ただし、同じものを視たことを過信することは許されない。ヴィデオに限らず、視覚的刺激の均一性の限界については慎重に考えなければならないであろう。たとえば、若い女性と年輩の女性が廊下でぶつかる場面で、ある被験者から年輩の女性の着物姿に関して過剰反応とも思える反応が見られたことがあった。「着物を着ているから」と何度も答えたその被験者のアタマの中で、そのことが「保守的」という解釈につながっていたのか、「しとやか」という解釈につながっていたのかは、調査者には直接には知らされないことである。人の目は、カメラのように映像を捉えるのではなく、アタマというフィルターを通して「色眼鏡で」ものを視るのである。被験者にはすでに言語文化的背景のバイヤスがかかっていることを、今回の視覚刺激情報についても心得ていなければならないと、自戒を込めて認識する必要がある。

調査の均一性

９名の調査者は、実際の調査では自分の専門としない言語や地域の調査にも協力しあって出かけている。それぞれの調査が、同じ条件で行われるために、調査票は共通な「脚本」形態をとることとした。たとえば、調査表１の冒頭は、このような書き出しになっている。「今日はお忙しいところご協力いただき、ありがとうございます。いまから，ふだんの暮らしの中で経験しそうな場面を 3 つほどお考えいただきます。＊＊＊さん御自身が，そういうときのことばづかいなどについてどんな考えをお持ちなのか、また、そういう場面もしご自分だったらどんな言葉遣いをなさるか、などをうかがいたいと思います。…」 このようにして、タテマエとしては、映像だけでなく調査に使われた言葉に関しても、調査者によるばらつきを予め取り除いたはずであった。

しかし、実際には、調査の現場で多少の言い換えや補足をせざるを得ないことが起こってくる。特に、被験者が非常に慎重で、厳密な定義に基づいた言葉の解釈を要求してきた場合、あるいは外国人被験者が日本語能力の関係で理解できないと言った場合、答えてもらうための努力の一環として、調査票から少しはずれることも臨機応変に行わなければならないこともあった。この種の面接調査では、大学入試における聴解試験のようなコントロールを加えることは不可能に近いし、被験者との友好的雰囲気作りを犠牲にしては、良い結果は得られない。すべての調査は録音されているので，聞き直す段階でデータの質に関する調整は可能であるが，この点についても、許容の範囲をどこに設定するのかは、今後の課題として残っている。

被験者間の「合意・同意」

調査場面で問題となったことの一つに、被験者間の「合意・同意」がある。面接では、調査者・被験者の割合は平均 1 対２－３であった。被験者のグループ構成によっては、それぞれの個人的意見を自由に発言できるとは限らない組み合わせになった可能性も否定できない。特に職場のグループ、夫婦等の場合、誰が先に意見を述べるかで、他の被験者の意見が微妙に変えられていく危険性もあるように思われる。日本人同士の場合は、調査者にも人間関係についての推測はできるが、外国人グループについてその点を見極めるのは、至難のわざである。データ入力の際には、このような点も考慮に入れ、答えが自発的に出されたものなのか誘発されたものなのかを区別する欄を設けている。しかし、一般的に言って、グループ面接調査でデータを引き出す場合のグループ・ダイナミクスをどのように解釈するかについての考察が必要となることを、今回の一連の調査でも実感した。

分析の視点：エスニシティーで縦割りしてよいか

前述のように、調査はブラジル・アメリカ・フランス・韓国・ヴェトナム在住の日本語話者（日本人）および日本在住のそれらの国々の人々（外国人）に対して行われた。その過程で気づいたことは、「ブラジル的物言い」や、「韓国風な口のきき方」など、それぞれの言語文化社会の規範を丸ごと，あるいは縦割りで解釈することを安易に行ってはいけないという点である。

例えば、在日英語話者（アメリカ人）調査に協力してくれた被験者のグループでは、分析の際に「都市化」が変数となり得るような答えが見られた。パスポート受付窓口に急いでやってきた男性の割り込みを許すかどうかという質問に対して、「許さない」「許す」が二つに分かれたことがあったが，その際彼ら自身が語っていたように、ニューヨークのような大都市では、順番を乱すような行為は厳しく糾弾されるが、アリゾナのような土地柄ではおおらかに許されてしまうということである。そこでは、都市化現象とともに、社会の成員間の人間関係が濃密であるか希薄であるかによって、答えが分かれている。同じようなことが、フランスにおける日本人調査でも発言されている。「パリはフランスではありませんから、…」という前置きに続いて、クレールモンフェランの人々がいかにパリの人々と違うかを強調した被験者も数人あったことが思い出される。

それぞれの被験者の答えを聞いていると、「○○人」「□□語話者」という区分では分類できない種類の答えが非常に多いことに気づかされる。人々が「何を気にして」言語行動を律しているかを理解するためには、いわゆるエスニシティー（民族性）のみでない原因帰属を考えないと収集したデータを分析することは不可能になるであろう。生育歴、家族関係、海外滞在年数、性別、世代差、など、被験者のフェースシートからうかがいしれる要因は、エスニシティーだけに頼らずに言語行動を律する規範の原因帰属をしていくための変数として有効である。同様に、言語文化社会の「◇◇文化」あるいは「▲▲語」という単位も、不特定多数の変数の束として捉えることが重要なのであろう。

以前アメリカでベストセラーを長く続けたデボラ・タンネン氏の You Just Don't Understand という書物には、言語行動の男女差についての事例が多く紹介されている。その本が日本語にも翻訳されて多くの読者の共感を得たことは、それが日本語話者にも通じるものを含んでいたからであろう。そのほかにも、洋の東西を問わず、年齢差やポライトネスを意識した物言い等には地域差・民族差を越えたグローバルな規範が見られる可能性が高い。

今回の調査研究の結果、言語行動の規範意識がどのような変数の束によって形成されているのかが、分析の段階で部分的にでも明らかになり、言語行動のグローバルな広がりを射程に入れたさらなる研究段階へと発展していく基礎となることを念じている。そのことの最初の一歩を、最終年度の報告書というかたちで実現していきたい。

Ⅱ．順番を待つ姿勢

杉戸　清樹

「並ばない」人たちの「沈黙」

筆者の主として担当した国はベトナムとブラジルだった。最初，こういう調査が可能であるのかどうかのアタリを付けてくるように言われて一人で出かけたのがベトナム。ホーチミン市に入り，ハノイ市に回った。ブラジルは，それが２度目の渡航になる尾崎喜光氏に導かれて，サンパウロ市だけに行った。筆者にとっては，どちらも初めて行く国だった。

その後，本調査のために２度，３度と両国に入りそれぞれの国のさまざまな光景に触れた中で，いくらかは観察者としての姿勢を心がけた旅行者の目に印象深かったのは両国の「並ばない」人たちの，それも「沈黙」した姿だった。

たとえば，ベトナムの駅や郵便局の小さな窓口に同時に差し出される数多くの手，サンパウロの地下鉄ホームで乗降口ごとに固まることなくほぼ均等に広がって待つラッシュ時の利用客，いずれも，少なくとも日本のようには「並ばない」姿である。その密集度にまずは圧倒された。もちろん，たとえばかつて経験したロンドンの駅のビールスタンドで先を競う客の姿，北京の市内バス乗り場でまだ停車していないバスに取りつく乗車希望客の姿などを思い出しつつ，なるほど，ここでもまたこういうものかと気をとりなおしたことも確かである。

しかし，もう一つ，今回のベトナムやブラジルで不思議な印象を受けたのは，そうした「並ばない」人たちの「沈黙」だ。寡黙というか，ともかく皆おしだまってその人だかりをこなしているように見える。かつてロンドンや北京で見たそれぞれの人だかりでは，当事者たちの声，それも筆者の耳にはするどく大きな声が聞こえていた。場面の違いを差し引くべきだとは考えながらも，そうした人だかりには不似合いな静けさが，今回は強く印象に残っている。日本人の耳には，そこに集まったこと，窓口の用事や乗車ということをめぐる言語的なやりとりが，いくらかなりとも聞こえて欲しかった。

並ぶ順番をめぐる「静かさ」

「並ばない人たちの沈黙」が筆者の印象に残っているのは，それと関連すると思われる次のような質問が今回の調査にあるからだ。

○駅の窓口や店の売場などでの順番について，日本とこの国（対象国）を比べて下さい。

①順番のことで，他人に注意することはどちらが多いですか？

②順番のことで問題があっても，黙っていることはどちらが多いですか？

③順番に関してのもめごとやいざこざを見かけるのはどちらが多いですか？

④順番に関してのもめごと（口論など）は，どちらが激しいですか？　　［一部省略］

現在のところ，ベトナムのデータは集計段階に至っていないので，ブラジル・韓国・フランス・アメリカの４か国だけについて中間的な集計を試みた。すると，質問の①，②，③に関して，ブラジルと他の３か国の間で，前に述べたような「並ばない人たちの沈黙」というブラジルでの印象に関連しそうな差異が現れた。

①他人に注意することは？

	日本が多い	この国が多い	
ブラジル	42.9%	39.3%	(N=28)
他３か国	25.2	54.2	(N=107)

（「両国同程度」は省略。以下同じ）

②黙っていることは？

	日本が多い	この国が多い
ブラジル	42.9	39.3
他３か国	65.4	20.6

③もめごと・いざこざを見かけることは？

	日本が多い	この国が多い
ブラジル	46.4	46.4
他３か国	22.4	54.2

すなわち，ブラジルにいる日本人回答者は，順番のことで他人に注意する機会の多少についても，逆に黙っている機会の多少についても，さらに，もめごとやいざこざを見かける経験の多少についても，日本とブラジルとの間にほとんど違いを示さない。これに対して，他の３か国にいる日本人回答者は，他人に注意する機会やもめごと・いざこざはそれぞれの滞在国の方が多く，黙っている機会は日本の方が多い，という差を意識している。全体として見れば，ブラジルの日本人は，ほかの国にいる日本人よりも窓口や店先での順番をめぐる言語的なやりとりが日本と同程度に少ない（ほかの国の回答者より相対的に少ない）と見ていることになる。

いったん事が起こると

これだけのことであれば，日・外の行動様式の異同についての観察・意識が滞在する国によって異なる場合があり，その一例として，他の３か国と比べた場合のブラジルが日本に近く把握されていることをデータが示していると指摘しておけばよいのだろう。ついでながら筆者の文字どおりの管見に基づく印象もこれと重なっている。

しかしながら，もう一つの質問④の集計結果はそれを許さない。

④もめごと（口論など）の激しいのは？

	日本	この国	同程度
ブラジル	10.7	89.3	0.0
他３か国	9.3	72.0	8.4

一旦，順番のことで口論が起きたときのその言語行動としての激しさを質問しようとしたのが④だが，ブラジルの日本人の方がよりはっきりと，日本より滞在国が激しいと答えている。

前の三つの質問からくみとられた，日本人と同じ程度静かに順番を待つブラジルの光景とはずいぶん異なる姿を描くことを求める数字だと思われる。

話は少し広がるが，今回の調査の中には，これと同じような方向を向いた結果を示す別の質問項目がある。

パスポート発給の役所の窓口で，一人の男性が再発給を願い出て交渉している。そこに，別の男性が割り込んできて「急いでいるので書類の受付だけでも先にして欲しい」と希望を申し出る。そんな内容のビデオ映像を見てもらい，そうした事態についての回答者の言語行動意識をさまざまに尋ねるのだが，その中に，割り込まれた最初の男性がどのような対応をすると思うかを，その事態が日本で起きたときと，滞在国で起きたときとで区別して答えてもらう項目がある。次の五つの選択肢が準備されていて，中間集計は下記のようになっている。

①「私が先です」と言葉で抗議する。

②言葉には出さないが，迷惑そうな態度や表

情を見せる。
③係が割り込みを許すなら，言葉で抗議する。
④係が割り込みを許しても，仕方ないと思って待つ。
⑤「どうぞお先に」と譲る。

	日本で（全体）	ブラジル	他３か国
①	18.5(%)	75.0	61.6
②	47.4	17.9	15.8
③	16.3	10.7	11.2
④	23.0	7.1	9.3
⑤	8.1	3.6	3.7

質問は，横から割り込まれた当事者が，それぞれの国であればどの行動を選択すると思うかを尋ねている。つまり，前に見た「もめごとや口論」という事態の起きる可能性を問うていることになる。その質問で，ブラジルにいる日本人は，日本や他の国でよりも高い可能性で言語的な抗議がブラジルでは起きるだろうと答えた。このデータも，前に見た質問④と同様に，日本と同じ程度静かに順番を待つブラジルの光景とは異なる姿を描くことを求める数字と言わなくてはならない。少なくとも，いったん事が起こったときには日本と異なる言語場面が現れると感じて暮すのが在外日本人であり，とくに在ブラジルの日本人はその差異をきわ立たせて意識していると解釈できる。

「順番を待つ姿勢」の違い

日本で見るようには並ばずに，しかし，ほかの調査対象国より他人に注意することも少なく，問題があっても黙っていて，しかしいったん事が起これば日本より激しい言語場面が現れる。こうしたブラジルの姿は，ベトナムについても指摘できるのではないかと筆者は考えている。調査の過程で得た回答の大まかな傾向についての印象は，むしろベトナム在住の日本人の方がブラジル以上にそのことをはっきりと意識して暮しているらしいというものだった。

調査結果の詳しい分析は，他の多くの関連質問の検討とあわせて今後の課題であるのだが，いずれにしても，日本人の目にそのように描かれる言語行動様式をどのように解釈すべきかは，その先も続く課題となる。

性急になることを自戒しつつ筆者の考えるのは，順番を待つということの姿勢，あるいは順番を待つということにまつわる社会的な規範のあり方の彼我の差異ということだ。

仮説として，一方に，列を作ってその集団の中の順序に自らを位置づけて待つという行動様式（ないしそうすべきだという規範）があると考えてみる。これは，日本人が日本で意識しているものであり，また今回の調査でいえばアメリカ・フランス・韓国という国で暮す日本人がその国にも存在すると考える様式である。

この様式・規範を持った日本人がそれぞれの外国で暮している。その規範によれば，列を構成する集団の中の順序を守る義務から逸脱した者については言語的な批判が向けられる。上記の３か国に暮す日本人はそうした批判が日本で経験するよりも多くなされると意識している。他人に注意することは外国の方が多く，黙っていることは日本の方が多いという調査結果がこのことを説明する。また，もめごとやいざこざが外国に多く，その程度も外国のほうが激しいという調査結果も，規範への忠実さの程度において日本をしのぐと解釈することで理解できる。

これに対して，ブラジルでは，他人への言語的な批判の頻度や問題があっても黙っていることの頻度は日本と変わらないと意識されている。ベトナムもおそらくそうである。異なるのは，いったんもめごとが起こったときの激しさや，直接みずからが割り込まれたときの抗議の頻度であって，この点では日本とは大きく異なり，さらに他３か国とも異なる。前に仮設した一方の規範からは，日本との共通性は説明できるが，日本や他３か国との差異は説明できそうもない。

もちろん，順序を守らないということを含めてルール違反行動一般に対する批判や抗議そのものの激しさについて，この二つの国が日本や他の３か国と異なる基準を持つと説明すれば，得られたデータは解釈できるだろう。そうした別個の領域の基準や行動様式規範を考慮に入れることは必要な態度でもある。

しかし，それだけでは，窓口に殺到して差し出される手の多さやホームの全体に広がって並ぶ乗客の姿は説明できない。

そこで，もう一つの仮説として，他方に，列は作らずにともかくも窓口の応対の時機のくるのを一人一人が別個に待つという行動様式（ないし規範）があると考えてみる。そこでは，みずからを列をなした集団の順序の中に位置づけるという意識は希薄であって，一人一人がただ待っているだけだと考えてみる。

そのように待つ人にとって，他の待つ人は基本的にはいないも同然であり，少なくとも順序のあとさきを意識する競争相手ではないという意識はあり得ないことであろうか。仮にそうで

あれば，他人に注意や批判をすることは考慮の外である。ほかに問題があっても当面黙っているのが自然である。しかし，直接に自分が用件を果たす機会を得たときに横から割り込まれたとすれば，それは自身の得た機会を損うことであって，「私が先だ」と抗議するのが当然であろう。いったんもめごとや口論が起きれば激しくもなろう。

筆者としては今，たとえば，そのように考える道を模索している。標題に掲げた「順番を待つ姿勢」とは，そこに想定されるべき行動様式や規範を背景とした個々の行動の姿である。ベトナムやブラジルで何人もの回答者から聞いた「この国には並ぶという習慣がない」という表現を，そのような枠組みで考えていきたい。

Ⅲ. 言語調査報告記

生越　直樹

我々は，日本人と外国人との異文化コミュニケーションにおける問題点を調べるため，これまで海外の５カ国に在住する日本人に対して「ビデオ刺激による言語行動意識調査」を行ってきた。また，同様の調査を逆に日本に在住する同じ５カ国の外国人に対しても行っている。調査の中で筆者が担当したのは韓国・韓国人，つまり韓国在住日本人と日本在住の韓国人に対する調査である。現時点では，韓国での調査は終了し，日本での調査が進行中である。韓国・韓国人関係の調査の他にブラジル，ベトナム在住日本人の調査や日本在住のブラジル人への調査にも参加してきた。ここでは，これまで調査に参加してきた中で改めて気づかされたこと，驚かされたことを書き留めておきたい。

ひとまとまりからそれぞれへ

ある外国に長く住んでいると，だんだんその国のことがわかってくる，見えてくるようになるとよく言われる。筆者もその通りだと思うが，では具体的にどこがこういう風に見えてくるのかと問われるとなかなか答えにくい。今回調査をしていく中で，その国が見えてくるというのはこういうことなのか，と気づかされることがあった。

調査の中に，日本のマンションの廊下で急いでいた若い女性があやまって年輩の女性にぶつかってしまう場面を見せ，もしその場面に出てくる二人がともに現地の人だったらぶつかったあとどうなると思うかと尋ねる項目がある。在韓日本人にその項目を調査する中で，大まかに言って２つのタイプの答えがあることに気づいた。一つは，韓国人なら道で身体が触れても謝らない，この場合もぶつかった方は何も言わずに通り過ぎるだろうという答え，もう一つは，相手が年輩の女性だからぶつかった若い女性の方は謝るだろうという答えである。要するに，二人の登場人物の年齢に注目する人としない人がいるのである。今行っている日本在住の韓国人への調査では，年齢の差に注目して若い女性が謝るだろうと答える人が多い。ということは，年齢差に注目した人たちは，韓国社会では年齢の差が重要な要素だと気づいているのだろう。それだけ韓国社会が見えてきていると言えるかもしれない。一方，年齢差に注目しなかった人たちは，実際街でいろいろなことを見かけたり，自分で体験しているにもかかわらず，まだ韓国社会が見えていないのかもしれない。全体の分析が終わっていないので，はっきりしたことは言えないが，どちらかというと，韓国に来てあまり期間が経っていない人の方が年齢に注目しない傾向がありそうだ。ただし，現時点で，年齢に注目する人は韓国社会が見えてきていて，注目しない人は見えていないと結論づけるのは性急だろう。

いずれにせよ，最初は，韓国人というひとまとまりのものにしか見えなかったものが，ある時点からいくつかに分けて見ることができるようになる。韓国では，年齢が重要そうだと気づき，若いか年輩か，あるいは年上か年下かという視点で行動を見ていくようになるのだろう。その社会で重要だと思われる要素に気づくということは，その社会が見えるようになるということではないか。調査をしながら，そんなことを感じた。

上で挙げた項目について付け加えておくならば，答えの中には年齢の他に，知人か否か，ぶつかり方に注目する人もいた。重要な要素は年齢だけではなさそうである。また，長く滞在している人でも年齢に注目しない人もいるので，そのあたりの詳しい分析がこれからの課題である。

韓国とベトナム

最初に述べたように，筆者はベトナム在住の日本人調査にも参加した。そこで大変驚いたことがあった。調査では先ほどの廊下でぶつかる場面も含め，被調査者にいくつかの場面を見せ，ベトナム人だったらこういう場合どうすると思いますかという質問をした。そこで返ってきた回答が，韓国在住の日本人が韓国人について述べた回答とそっくりなのである。たとえば，廊下でぶつかる場面だと，ベトナム人同士なら謝らないだろう，道でぶつかっても知らんぷりだ，相手が年輩の人だと謝ることもある，などベトナム人の言語行動についての回答が，韓国人の言語行動についての回答と本当によく似ている。廊下の場面以外でも韓国とベトナムでは似た回答が多いという印象を持った。韓国人・ベトナム人の言語行動が実際に似ているかどうかは別として，どうも日本人の目から見ると，両民族の言語行動は似て見えるらしい。言い換えれば，日本人からすると，韓国人もベトナム人も同じような点が気になるということなのだろう。

それにしても，ベトナム調査で韓国調査と似たような回答が得られるとは筆者にとっては予想外であった。筆者は朝鮮語が専門なので，これまで日本と韓国を比べて考えることは多く，よくこの点は日本的であの点は韓国的などと勝手に判断してきた。今回日本人在住者のベトナム人評を聞いて，これまで韓国的だと思ってきたことの多くが韓国だけのことではないと知った。二つの国を比べるだけだと，その違いを民族性の違いにしてしまいやすい。民族性の違いというのは，原因がよくわからないことがあれば民族性の違いとしておけばよいという点で，はなはだ便利なものである。また，民族性というのは，いわばブラックボックスのようなもので，何でも一旦そこに入れてしまえばそれ以上考える必要がなくなるという点で大変危険な物でもある。二つの国を比べて，これはこの国独特だなどと言うのは危険だとわかっていたつもりであるが，知らぬ間に自分もそういう考え方をしていた。今回韓国以外の調査を行うことによって，その危険性を実感することができたのは筆者にとって大きな収穫だった。

今回の我々の調査では，これまで民族性として処理されてきたことを様々な視点からより詳しく分析しようとしている。同じ調査を５カ国の在外日本人，在日外国人に行い，さらに同じ調査を日本の複数の地域の日本人に対して行うのは，できるだけ得られた結果を相対的に見るためである。今後の結果分析で，これまで安易に韓国的だと思ってきたことは一体何なのか，その答えを明らかにできればと思っている。

以上述べたほかにも，海外調査を通じて気づいたことが２点ある。一つは韓国調査のときに思ったことで，日本人と現地社会との接し方がより多様になってきている。滞在の理由も駐在員（の妻）として，日本語教師として，留学生として，あるいは韓国人男性の妻として，など様々な形態がある。さらに，駐在員の妻の中には韓国語を習う，韓国の刺繍を習うなど，韓国の人や文化に接しようとする人がいる。現地社会への関心の度合い，それに適応していこうとする姿勢の度合いは，今回の調査結果にも影響を及ぼす可能性がある。

もう一つは，ブラジル調査のとき気づいたことである。ブラジルで調査した人の中には，将来とも日本に帰国せずブラジルで生活したいという希望を持つ人がかなりいた。ブラジルには日本から移民してきた人も多いが，そういう人以外でもブラジルへの永住指向がある。韓国やベトナムでは，現地に永住するつもりの人は，現地の人と結婚した女性ぐらいでほとんどいなかった。現地に永住するつもりか否かも，調査結果に影響がありそうである。

残念ながら上で指摘した現地社会への関心や永住指向については，今回の調査では被調査者ごとの情報が得られていない。ただし，今回の調査は現地に出向いて行っての面接調査であり，なおかつかなりの場合，被調査者の自宅や勤務先で調査を行っている。その分，調査者が被調査者の現地での生活をかいま見ることができたわけで，そういう情報はアンケート調査などでは得られない情報である。そういう我々が調査に付随して身に付けてきた情報というのは，結果分析のときにいろいろ役立つのではないかと思う。

Ⅳ.「 Watch where you're going！」の周辺
－在日米国人・在米日本人調査から－

佐々木　倫子

ぶつかられた人が言う言葉

新プロ「日本語」第二班の西原チームで、主として英語母語話者と日本語母語話者との言語接触に関する事象（以下、「英語」調査と略）を

分担している立場から、これまで行った在日米国人・在米日本人調査についてひとつ報告したい。この調査は、日常生活にありそうな場面から構成された刺激ビデオを用いたインタビュー形式の調査で、全６場面からなり、インタビュー項目は 200 を超える。ただし、一気に 200 以上の質問をするというわけではなく、通常、１回の調査量はその半数以下の２場面か３場面になっている。

第一場面は、東京のマンションの廊下での出来事と設定されている。ちょうどその場面の調査手順が第３回研究報告会予稿集にも出ているのだが(pp.23-24)、まずはじめにビデオ視聴なしのインタビューをする。ビルの廊下での見知らぬ人とぶつかった時の言語行動を話題に、「英語」調査では、日本と米国で回答者自身や他の人々がどう振るまうと思うかについて、いくつかの質問をする。次に音を消したビデオ画面に基づいて、いくつもの質問が用意されている。マンションの廊下で、見知らぬ女性同士がすれちがう時、若い女性が急いでいたために年輩の女性とちょっと体が触れあってしまう。そして、二人は何か言葉をかわしているといった場面である。ビデオの最初の場面は、ぶつかった方、ぶつかられた方のどちらが先に声を発するかもわからない状況で切りとってあり、「どちらが先に声を出すと思うか」という質問もある。しかし、徐々に先まで進み、ぶつかられた年輩女性が、ぶつかった若い女性をじろっとにらみながら、低いが強さをこめた声で「危ナイワネー！気ヲツケテヨ」と言っている場面の確認もされる。音声無し視聴から音声付き視聴へと進むなかで、いくつもの細かい質問に答えてもらうというふうに、段階的に回答を得ていくのである。

「危ナイワネー」の間接性

米国人の回答者の中に在日１年足らずのＢ氏がいた。30 代前半のエンジニアで、日本語能力は初級前期であろうか。日本人との接触は多いが、同僚の日本人の多くが英語を話し、仕事はほぼ英語で行っている。Ｂ氏は年輩女性の表現に関して以下のような意見を述べている。(原文英語)

――彼女は不満そうだった。おこっていた。押さえ気味の口調で、非常に典型的な日本人の反応だ。「Watch where you're going」と言うかわりに、間接的に「That's dangerous.　Be careful.」と言った。――

Ｂ氏によれば、ぶつかられた側がぶつかった側を非難する際の発話が、いかにも間接的で日本人らしいというのである。

1998 年 1 月 29 日（木）の朝日新聞の「声」欄に「けんかとめた子供のひと声」と題する 67 歳の男性の投書が載っている。

――（前略）外に出た時、怒声が聞こえてきたので見ると、人だかりが出来ていました。

出ようとした車の若者たちに向かって、接触寸前だったらしい直進車の中年ドライバーが、車内から出て、血相を変えて詰め寄っているところでした。

「いきなり出て来て危ないじゃないか」。若者たちも車内から応酬し、険悪な空気で一触即発の状態になりかけているのは、だれにも分かりました。（後略）――

投書はこの後、小学生の一団が「みんなにこにこ安全運転」と声を合わせて、事態が急転直下明るく解決する様子へと続くのだが、ここでの「危ナイジャナイカ」は誰から見ても、きわめて強い警告の機能を持つと言えよう。

投書と同様に、ビデオを見た日本人の回答者で、年輩女性が発する言葉を間接的だと言った人はいない。年輩女性の音調とぶつかった状況から、同意を求める発話ではなく、警告を発する機能を持つ発話であることが明らかだからである。ところが、アメリカ人Ｂ氏は、日本人年輩女性の「危ナイワネー」を「それは危ないことですね」という客観性を帯びた叙述文のように受け取り、「日本人は間接的な表現をするが、これもその１例だ」と感じたと思われる。

「Watch where you're going」の間接性

個人的な体験への言及になるが、Ｂ氏のコメントを聞いた時、私は自分の米国生活の中での、ある体験を思い出していた。今から四半世紀以上前、米国に住んで１年ちょっとぐらいの頃であった。車を運転していて、右隣りの車線に移ろうとハンドルを切ったことがある。右側を確認してから切ったつもりだったが、ちょうど視線が遮られたところにバイクが来ていた。幸いバイクがうまく避けてくれたので、ぶつからずに済んだのだが、まさに危機一髪の回避であった。その時、バイクに乗っていた中年男性が運転席をのぞき込むようにして言ったのが、「Watch where you're going」である。今でも、言い終わって顔を前方に戻した白人男性の、不機嫌そうな横顔と、低く押さえた声を思い出す。

それ以前にこの表現に接したことがなかった私がとっさに感じたのは、表現の「間接性」で

あった。アメリカ人は「自分の行く手を見よ」などと、何と間接的な言い方をするのだろうかという感想だったのである。しかもその男性の低い押さえ気味の声を、物静かな人でどなられなくてよかったと感じたのである。

しかし、数年米国に住み、母語話者感覚に近いものが形成されてくると、上記の表現はまさに日本語の「どこ見てるんだ！ぼやぼやするな」としっかり結びついてくる。その上、米国人男性が本気でおこったら、高めの声でどなるというより、低めの声でドスを効かせて警告を発するなどというのも知り始める。直訳をして、そこに間接性を感じとったのは、ひとつひとつの単語の辞書的意味にとらわれる、初期の第二言語話者にありがちな理解のプロセスが引き起こしたものであることを自覚するのである。

これはけっして日本語が英語に比べると間接的に表現することが多いという観察を否定するものではない。日米の修辞法を対照させると、そう結論づけたくなることも多い。ただ、個々人が第二言語・相手文化についてどんな仮説を立てて行動しているかを調査する時、そのうちのどの仮説が主として表出形式とコンテクストとの結びつきが弱いために成り立っているかを、調査者側は判断しなければならない。

今回の調査で、私自身が在米日本人としてインタビューを受ける側だったとしたら、インタビュー時における米国滞在年数によって、回答の中身が当然異なっただろう。この調査で知りたいのはまさにそこで、どんな行動仮説が立てられるかと同時に、仮説の修整が起きるとすれば、それが、いつ、どのようなきっかけで起きるのかの一端をつかみたい。しかし、自身に引き寄せて考えてみても、修整したきっかけをはっきりと意識していることはまれである。集計された回答の全体像から、仮説の修整のプロセスも捉えたいと願っているが、そう簡単には見えてこないことも承知している。

警告の表現の日米対照

第１場面のビデオ調査では、年輩女性の日本語の表現を確認した後で、以下の質問がなされる。

質問 1.2.6.　同じ場面が、もし米国で（米国人同士の間で）起きたとしたら、ぶつかられた方が相手の謝ってくる前になにか言うとして、この日本のビデオと違った言葉を言うと思いますか？それとも、大体同じような言い方でしょうか？

現時点で入力の終了した回答は、在日米国人 25 回答、在米日本人 38 回答である。1.2.6.の回答は以下の通りである。

	米国人	日本人
①大体同じだろう	13 人(52%)	４人(11%)
②異なるだろう	４人(16%)	15 人(39%)
その他	５人(20%)	13 人(34%)
無回答	３人(12%)	

なぜ、日本人と米国人では異同の割合が逆転するのか、「その他」の回答は何を示唆するかなど、考えるべき点は多いが、ここでは、その次に来る質問の部分について述べたい。

インタビューでは、米国人が同じような言葉を言うか･言わないかだけでなく、英語ではこんな言い方をするというコメントまで、なるべく引き出すようにしている。そして、そこにはまた、日米で差異が見られるのである。

米国人の 22 人が何らかの英語表現を、単数あるいは複数口にしているのだが、そのうちの前述のＢ氏をはじめとする 11 人（英語表現をあげた人の 50%）が、ほぼ同じ表現をあげている。「Watch where you're going!（気をつけろ）」（含・「Why don't you look where you're going!」）である。

半数が口にするというのは、かなりの高率である。これまで入力が終わった段階で見ると、ポルトガルやフランス語といった他の言語でこれだけ高率で現れた表現はない。

それでは、日本人のほうはどう回答しているか。特に英語で言ってほしいとはしなかったので英語表現を口にした人自体が、10 人と少ないのだが、その中で一番多いのが「Watch out!（危ない）」の４人である。日本人の中に「Watch where you're going!」をあげた人は一人もいない。「Watch out!」を在日米国人のほうで見ると、７人（32%）で２位である。（「Watch where you're going!」との複数回答者を含んでいる。）

もともとインタビューの回答者数が少ないという限界は大きいが、なぜ日本人の側では「Watch where you're going!」がなくて、「Watch out!」だけなのだろうか。ビデオの中の状況では動いている状態でぶつかっており、「Watch where you're going!」のほうが、より適切な表現に思われる。

「Watch out!（危ない!）」が選ばれる理由

なぜ、「Watch where you're going!」が避けられるのかについて、現時点では以下の可能性を考えている。

(1)第２言語話者の場合、長い、言いにくい表現は、理解表現にはなっても、時間的に緊迫した状況でのとっさの使用表現としては回避される。そのため、インタビューの応答でも出てこない。

(2)ぶつかる人が移動中であろうと停止中であろうと使える、汎用性の高い表現の方が選ばれやすい。

(3)話し手（を含めた周囲の人間）が迷惑するから気をつけろと聞き手に警告する意味の「Watch where you're going!」に対して、「Watch out!」には同様の警告の意味の場合と、聞き手自身が怪我などするといけないから「気をつけて」とする聞き手への思いやり、忠告の場合とがある。そのため意味の広い表現である「Watch out!」が選ばれやすい。

(4)米国人が自身で思うほど「Watch where you're going!」は使われていない。たいていの状況で日本人が聞くのは「Watch out!」が多い。

米国人回答者H氏は米国の地方の小都市の出身者で 30 代前半の会社員である。この回答者は自分からぶつかった時は無論のこと、逆に、自分のせいではなく、相手にぶつかられてしまった時も、「大丈夫デスカ」と言うかもしれないとする。H氏の理由の骨子は以下の通りである。

「Watch where you're going!」のような失礼な攻撃的な表現を、人は普通は使わない。ニューヨークやロスアンジェルスのような大都市では、人は知らない人と話すのを恐れて、相手が謝ってくるのを待つだろうし、小さな町では人は親切だから警告の言葉は言わない。

一人の意見に過ぎないが、米国社会における見知らぬ人同士のコミュニケーションの一端をついていると言えよう。

インタビュー回答者となった在米日本人は、日本語であっても英語であっても、攻撃的な言葉遣いを日常的にする人々には見受けられなかった。米国において、周囲の米国人と友好的に、時に注意深く、日常生活をおくることを心がけている人々に見受けられた。この人たちの実体験の中で、攻撃的な表現を口にすることは無論のこと、他人から直接的に浴びせられることはまれなのかもしれない。従って、インタビューでとっさに答える場合にも、出てこない可能性がある。

在日米国人・在米日本人調査では、相手言語が話される社会で、社会人として機能している方々に、忙しい合間をぬって答えていただいた。似たような質問が繰り返されるのに対して、気持ちよく、冗談までまじえながら、忍耐強く答えてくださった回答者の方々に、この場を借りて心から感謝したい。

Ｖ．韓国・ベトナム調査から

石井　恵理子

新プロ第２班西原チームの協力者として、９７年１月の韓国調査と１１月から１２月にかけてのベトナム調査の２つの海外調査に参加し、国内では韓国人に対する調査を行った経験の中から、ここでは主に２つの海外調査から得た雑感を記すことにする。

現地で調査するということ

韓国での調査は、週末は漢江沿いの高級アパート群に集中している日本人家庭を訪問し、平日は日本大使館文化広報部の建物内の日本語コースの教室を借りて行った。個人宅での調査は、初対面の方のお宅に伺う緊張感に加え、せっかくの休日に時間を割いていただいたことや次の調査に伺うお宅との約束が後に控えていることなどから、約束の２時間を超えないよう手際よく進めなければという気持ちで、かなり緊張しながら調査に入った。実際にその場に行ってみなければ調査に使わせてもらうビデオデッキがどこにどのような状態でおかれているかということをはじめ、調査場所の状況がわからず、事前に機械やビデオテープの頭出しなどの準備もできないため不安が大きい。調査直前にビデオが故障し、修理は間に合ったが配線ができていない、リモコンが作動しないなどの機械に関する小さなトラブルもあった。

それでも他の国での調査事情を聞くと韓国はむしろ問題の少ない調査地に属するようである。また、小さなお子さんのいる家庭の場合も、滞りなく調査を続けることはまず難しい。被調査者が赤ちゃんのおむつ換えや授乳に座を離れている間も、時間的制約を考えるとじっと待つわけにもいかず、隣室に向かって大声で質問・回答のやりとりをすることもあった。調査のやり

とりに重なって泣き声や叫び声が大音量で録音されている、データ入力アルバイタ泣かせのテープも数本ある。

ベトナム調査でもデータ収集の条件としてはなかなか厳しいものがあった。ホーチミン市内の日本語学校、大学の付設日本語コースの教室、宿泊先のホテルの会議室（といっても、本来はバーラウンジ）の３カ所での調査に加わったが、日本語学校の教室を除いては周囲の騒音は想像を越えるものであった。ホーチミン市は市内の至る所で昼夜を問わず建設工事が進められており、宿泊先のホテルもちょうど増築工事中とあって窓のすぐ外から猛烈な工事音が響き、調査に同席していて調査者の質問が時折聞き取れないこともあった。

また、大学付設日本語コースの教室は交差点に近く、道路にあふれんばかりに走るバイクの音、クラクションの音がひっきりなしに聞こえ、特に信号が変わって発進するときの騒音がひどい。やりとり全体をマイクで拾うことをあきらめ、被調査者一人一人の胸元にピンマイクをつけてもらい、とにかく回答の発話だけは録音できるように切り替えざるを得ない状態であった。直接調査にかかわるトラブルだけでなく、海外に出ると移動や食事などのあらゆる場面でも日本では意識さえしない小さなことが問題になる経験（たとえばデパートやホテルのないところでトイレはどこを探せばよいか、タクシーをどこでどうやって捕まえればばよいか、料金メーターの数字の単位は何か、など）はつきものである。時には冷や汗をかきながらも、しかしそうした経験はそれなりに楽しい経験であった。一人一人の経験や思いがことばとして語られたデータが、どのような社会にどのように暮らしている人々によって語られたことばであるかということをわずかな一面であっても実際に感じられた。「道を歩いていてだれかとぶつかる」という状況設定一つとっても、道幅が広く整備された歩道をゆったりと歩くことか、歩道に並べられた商品やしゃがんで談笑したり食事をしたりしている人々の間を縫い、あちこちにあいている穴やコンクリートの塊をよけて足下に気を配りつつ歩くことなのか、道を歩くということ、ぶつかるということの具体的な意味はどこでも同じではない。在日外国人調査での回答にも、「日本ではほとんどぶつかったことがない」「自分の国ではマンションの廊下を走っていたら泥棒だと思われる」といったコメントがあったが、調査者の頭の中にある日本的な情景に重ねてとらえていては理解できないことが実は重要なのだということを実感した。多くのトラブルも含めて現地の実状に触れながら調査を進めた経験は、データを読み、研究の方向を考える視点に少なからず力となることを実感した。

調査者自身の意識

調査地の実状に触れることの重要性について書いたが、今回の調査地である韓国とベトナムは調査者である私が調査時点で持っていた知識や経験、心理的距離感などにおいて大きな違いがある２国である。韓国ソウルは、配偶者の出身地であるために訪れた機会も多く、私自身の経験は旅行者や一時滞在の外国人としてというより、多くの場合配偶者を介してではあるが、韓国人家庭に属する身内的存在として韓国社会と接触を持ってきた。それに対し、もう一方の調査地ベトナムは、新聞・テレビ等での報道以外の情報をほとんど持たず、調査のために訪れたのが初めての滞在である。夜の便で空港に到着し、現地通貨に両替する余裕もなくタクシーでホテルに向かい、翌朝からさっそく調査という状況であるから、調査開始時には２度の食事を通して直接ベトナムに触れた舌と胃袋を除いては、まだほとんどベトナムに触れていないような状態であった。

このように調査者自身が調査地の社会や人々ににについて持っている知識、経験、心理的距離などが全く異なる２地点での調査において、調査者自身が被調査者の回答をどう受け止めたかということを内省してみると、当然のことながら違いがある。韓国の調査では、被調査者の語る事例を聞くとき、具体的な状況をイメージすることが容易であり、また自分自身の経験が思い起こされ、被調査者と自分の受け止め方を比較するような意識で回答を聞くことが多かった。ベトナム調査では、被調査者がそれぞれの立場や視点によって実に多様な姿でとらえているベトナム人の言語行動について、予備知識や理解の助けとなるような経験を持たぬ聞き手としてはどれも新鮮な情報であり、具体的状況をつかむ手がかりを得ようと頭を巡らしつつ質問した。その国の人々の言語行動や意識についての捉え方とどう関係するかという調査の観点そのものではないが、調査者が他人の経験や判断を聞き手としてどう受け止めたかということと調査者自身の経験等との関係を内省することは、滞在年数や社会との接触の範囲などこの調査の観点である要因と異文化の解釈やふるまいとの関係を考える一つの材料となるように思う。また、

調査者として自分の先入観が調査に影響しないような配慮は当然するにしても、あいづちの打ち方や話を引き出すための水の向け方など、聞き手としての態度にどこかで違いが現れていたであろうか。被調査者の意識とともに、調査者自身の意識も調査にあたっての興味の対象である。

夫婦単位での調査について

海外調査では短期間でできるだけ多くのデータを集めるため、ほとんどの調査は２人から３人一組で行った。被調査者同士である程度うち解けた雰囲気があることは、お互いの回答に触発されて内省が進み、一対一の調査より多くの事例やコメントを引き出せることも多い反面、被調査者同士の関係によっては他の被調査者の回答に引きずられてしまうこともあるなど、被調査者の人数および組み合わせは回答の内容に影響をおよぼす。特に、その国の滞在経験や現地語の能力にはっきりとした差があるような組み合わせでは、その国での経験豊富な被調査者の発言に押されてしまうことがある。被調査者の性格などにもよるが、被調査者間の関係によっては、声の小さい被調査者の意見を引き出すことにかなり気を配る必要があった。

被調査者の組み合わせについては、特に夫婦で回答してもらった韓国での調査が印象深い。ある夫婦はどのように質問してもまず夫が答え、それに続いて妻が「同じです」と続けるため、なんとか妻に先に意見を言ってもらおうとしたが、なかなかパターンを崩すことができなかった。また、それぞれの感じ方をそのまま答えてほしいと伝えても、「こうだと思うんだけど、どう？」と確認を相手に求め、お互いの意見を一致させようとするところなど、夫婦の関係が回答の様子に現れる。お互いにだいたい似たような意識であると思っていたものが、調査が進むにつれて自分の思いこみと違う相手の意外な側面に驚く様子もしばしば見られた。相手の回答に対して「いつもそう思ってやってるの？」「えっ、そんなことするの？」などという声があがったり、妻の驚いた反応に夫がちょっと口ごもると「いいから、言ってごらんなさいよ！」などと、夫婦の間で調査者そっちのけのやりとりがはじまってしまいそうになったりと、おもしろくもあり気もつかった。

夫婦という関係であってもそれぞれの言語行動や意識に違いがあること、しかし、普段は自分の意識を中心に、だいたい同じ意識のはずだという思いこみを持って行動している。

当たり前のことだが同じ日本人といえども千差万別、調査項目に対する回答も個人によって相当な違いが見られるが、それでも多くの場合、日常生活では違いが意識されずにいる。一方、あるところでは言語行動様式や思考の違いが重大なこととして意識され、異文化摩擦などと問題視される。違いがあるということと、違っていると意識することの間には、何があるのだろうか。

社会におけるの個人のあり方の違い

もう一つ、夫婦単位での調査で気がついたことだが、夫婦間では自分自身の言語行動や意識についての回答とともに、滞在国（韓国）の人々の行動をどう見ているかについての感じ方にも差が見られた。店やバス乗り場等での順番の意識に関する質問では、韓国でのどの調査でも、韓国の人は並ばない、順番を守る意識が薄いという意見（あるいは憤懣）が、具体的な事例を伴って語られた。しかし、概して妻が自分の体験としてそれに関連したトラブルを多く記憶しているのに対して、夫は自分自身の経験としては日本と際だって異なる印象をもっているわけではないことが多かった。

さまざまな事例を聞くうちに、同じ韓国人との接触経験があるといっても、夫は主に仕事上の文脈で、会社という組織を背景とした接触であるのに対し、妻はまったくの個人としての接触であるという違いが見えてきた。夫の主な韓国人との接触の場面では、会社という組織や肩書きによって、各自にある位置や役割が与えられている。お互いの関係や役割が明確に意識されている状況では、特に順番などということについて個人の意識が問題になることはまれで、予めだれが先であるべきかというルールができあがっている。しかし、妻の経験する買い物などでの韓国人との接触は、店員と客という役割はあるものの、客同士はそれぞれ個人でしかなく、その場の秩序はそこにいる個人の意識によっていかようにもなりうる。そのような場では、何の後ろ盾もなく、自分の力だけで相手と交渉し自分の利益を守っていかねばならない。社会と接触するときのそうした個人のありようが回答の違いに現れているように感じた。滞在年数や接触回数など量的な要因と同時に、個人がどのような社会的存在であるかという側面についても、今後の分析の際に考えて行きたい。

VI. ブラジルでの調査を終えて

尾崎　喜光

ポルトガル語もブラジル文化も特に専門ではない私が、ブラジル調査の主担当という立場になった。このような無謀とも言えるプランがこれまでの４年間の調査で何とか達成し得たのは、この調査に関するいろいろな方々の理解とバックアップがあったからこそであった。この調査のためにブラジルに４回も出かける機会に恵まれたのであったが、第４回目の最後の調査から４箇月経過した今これまでをふりかえってみると、「よくできたものだ」という思いと、「本当にいろいろな人に助けられた」という思いを新たにする。

本来であれば、現地でお世話いただいた方々の御名前や経緯を記してお礼を申し述べるべきところであるが、それについては今後予定する報告書にゆずらせていただき、ここでは調査を進める中で私が感じたことや、ポルトガル語やブラジル文化に素人の私がブラジル（と言ってもほとんどサンパウロ市内であったが）での短い生活の中で感じたことを少し綴ることとする。

面接調査というものは、調査対象者とまず挨拶を交わすことから始まるわけであるが、ブラジルで調査していると、この場面で相手の方から握手を求められることがしばしばあった。日本の言語調査ではまずありえないことである。１年目の予備的調査でお会いした日系人の方々に多かったが、２年目からの本調査でお会いした日本人の中にも手を延べてくる方が少なからずいた。言葉に随伴する行動に、ブラジル的・ヨーロッパ的な習慣が見られるわけである。日本人の中でも、滞在が長い人、今後ともブラジルにずっと住み続けることを考えている人、ブラジルという国や文化を心地好く感じている人に、握手が多いように感じた。残念ながら誰が握手をしたかしなかったかの記録は特に残してない。将来の調査ではこんなことも調査してみてはどうだろうか。

こうした脱日本文化化は、滞在国に対するその人の“思い”とも相関があろう。我々の調査では、フェイスシート情報として、その人の滞在年数や使用言語については尋ねているが、滞在国に対するその人の評価的な事項については特に尋ねなかった。今話題にした「握手」という行動ばかりではなく、我々が調査の中で質問した、滞在国でのその人の言語行動や滞在国の言語習慣への評価について分析する際に重要なファクターになるように思う。将来もし同種の調査をする場合には、そうしたことについても把握しておくべきだろう。

ヨーロッパ圏で生活する時は自分が悪くても絶対に謝ってはいけない、ということがよく言われるように思う。我々の調査でも「謝罪」を調査項目としてあれこれお話しを聞かせていただいたのであるが、その中でだんだん分かってきたことは、相手と深刻な利害関係にあるかないかということが、謝る・謝らないという言語行動を大きく左右しているらしいということである。

すなわち、自分の非を認めて謝るということが、例えばお金を出して弁償するという具体的行為に繋がるような場合にはブラジル人は謝らない（と日本人は感じている）が、そのような利害が絡まない場合は必ずしもそうではない、ということである。

一口に「謝罪」と呼ばれる言語行動も、その社会でどのような重みを持つ状況の中で行なわれるかということが、行為の有無を大きく左右するわけである。そうしたことを考えると、我々が取り上げた「謝罪」以外の調査項目についても、単に言うか言わないかだけを問うのではなく、それを言うということ（あるいは言わないということ）が、どのような状況の中でどのような重みをその社会の中で持つと考えられているか、というところまで踏み込む必要があるように感じた。

これも調査項目にあることだが、相手に何かサービスをしてその相手から感謝の言葉を受けたあとさらにどうするか。日本であれば特に言葉に出さず軽く頭を下げるということもごく普通のことと思うのだが、ブラジルの滞在生活の中で私自身が観察したところによると、ブラジル人はこんな場合大抵言葉に出しており、日本と随分違うと感じた。

例えば我々が宿泊していたホテルだが、食堂で朝食をとっていると店員さんがコーヒーの入った小型のポットをテーブルに持ってきてくれるのだが、こちらが「オブリガード」と言うと、必ず「ジナーダ」という言葉が返ってくる。宿泊していたホテルは特に高級なホテルというわけではなくごく普通のランクであり（日本のホテルの感覚からすればむしろ安い部類に入るくらいである）、特別社員教育がなされている風に

も思われない。そんなホテルでも、「ジナーダ」が必ず返ってくるのだ。サービス業だからというよりも、ごく普通の日常生活の感覚での言語行動のように感じられた。

我々が他者と言葉を交わすための絶対必要な条件は、相手もその言語を理解していると判断されるということである（と思っていた）。ところが、どうやら必ずしもそうではなさそうである。

サンパウロ市内で安全に移動するために我々はよくタクシーを利用したのだが、ある時こんなことがあった。

乗ったタクシーの運転手さんに行き先を告げてしばらくすると、むこうからしきりにポルトガル語で話し掛けてくる。ポルトガル語が分からない我々は、笑顔で頷きながら「フンフン」などと適当に応じているのであるが、しばらくやりとりしていれば、こちらはポルトガル語を全く理解していないことはすぐバレる。

にもかかわらず、こちらが相手の話に「フンフン」などと反応していたこともあってか、依然としてポルトガル語で話し掛けてくる。こちらが話の内容を理解しようと理解しまいと、話し掛けるという行為自体に意義があるという感じであった。

話し掛けるという行為は、話の内容や自分の意思を相手に伝達するためにこそ行なうものであり、従ってコミュニケーションの回路が開かれない時には話し掛けるという行為は生まれないと信じ切っていたのだが、必ずしもそうではない世界があることを知った。

国際化する日本においてその点どうなのであろうか。相手が日本語を理解できないということが分かり、かつ自分も日本語以外話せないような場合、それでも日本語で話し掛け続けることがありうるのか、それともそれっきりコミュニケーションを打ち切ってしまうのか。今年の冬季オリンピックの開催地である長野ではどうなのだろうか。興味のあるところである。

ポルトガル語については私は挨拶程度しかわからない。それでもブラジルは一応ヨーロッパ圏と言ってよいわけだから簡単な英語くらいは通じるだろうと思っていたのだが、それがほとんど通じないことが分かった時には驚いた。

例えばファストフードのお店に入ってカウンターの若い店員さんにオレンジジュースを注文するために「Orangejuice!」と言ったのだが、全く通じなかった。脇の篭に入れてあるオレンジを指差して何とか目的を達したのであったが、ホテルに戻って日系のフロント係の方にポルトガル語で何と言うのか教えてもらった。

日本語も国際化しつつあるということで始まったこの新プロの調査だが、国際化ということでは空間的広まりの点でも浸透度の点でも格段に先を行っている英語ですら、庶民の日常生活のレベルでは必ずしもそれほど国際化していないことを、身を持って体験した“事件”であった。

庶民レベルで日本語の「みかん」が、いろいろな国で使われるというようなことは、この先あり得ることであろうか。

Ⅶ. 在日フランス人・在仏日本人調査の周辺から

早田　美智子

研究班２の刺激ビデオを用いた調査の中で，筆者はフランスに在住する日本人（以下日本人）への調査と，日本に滞在中のフランス人（以下フランス人）への調査を担当している。今現在，日本人調査は終了し，フランス人調査も終盤に入っている。データ入力修正の途中段階ではあるが，調査を行っていく中での具体的な経験を中心に，現時点での印象をいくつか述べてみたい。

「できるかどうか，わかりません」
――依頼，引き受け・断りのパターン

調査を行うまでの接触や，調査のしかたそれ自体が，行動パターンの違いを認識する場となることがある。筆者自身にも，インフォーマントとの間の行動パターンの違いを考えさせられることがあった。

あるフランス人男性に，調査を依頼した時のことである。その人の状況からいって，２時間にも及ぶ調査をお願いするのは，無理かもしれないと思いながら，おそるおそる電話で依頼したところ，「できるかどうか，わかりません。」という答が返ってきた。この場合，いったいどの位の可能性があると判断するだろうか。

対日本人の場合なら交渉の初期の段階ですでに「どうも難しそうだな」とか「なんとかなりそうだ」というある程度の予測ができることが多いように思う。最初に「できるかどうかわからない」といわれた場合には，文字通りの意味ではなく「引き受けられない」という暗黙のシ

グナルを出していると解釈する場合の方が普通ではないだろうか。

この時も，調査に応じてもらえる可能性はほとんどないだろうと考えていたのだが，実際は他のインフォーマントも集めてくれて，問題なく調査ができたのである。その人によれば，「できなければできないとはっきりいいます。わからないといったのは，仕事の都合上本当にわからなかったからで，まだ可能性があります」とのことだった。また，今こうしてその時のやり取りを思い返してみると，筆者の「おそるおそる電話する」というやり方自体が，依頼の最初の段階において，直接的に Yes，No を問わないこと，問われた方もこれをはっきりいわないことをすでに前提とした行動である。

ところで，研究班２の調査では，日本のドラマの中に現れるあいまいな断りを段階的に見せて，引き受けるか断るかを日本人・外国人双方に聞いていくという部分があるが，日本人・フランス人とも大部分が「フランス人の方がはっきりと断る」と答えている。ただし，特にフランス人の回答には，「依頼された内容による」「場合による」「フランスでも直接的にはいわないが，どちらかといえば日本よりははっきり断る」といった条件付きの回答も見られるので，傾向としては，フランス人の方がはっきり断るとはいえるだろうが，そこには何か別の要因が関係してくる可能性もありそうに思われる。

「日本にいる私としては...」
――インフォーマントの立場

外国である日本，あるいはフランスに長い間住んでいる人の場合，回答する自分の立場をどこに置いたらよいか，また母国の人ならどうするかがよくわからず戸惑うことがあるようだ。

この調査では，あなたならどうするか，フランス人ならどうするか，日本人ならどうするかの３つの観点から詳細に質問していくのであるが，内容が混み入ってくると，これらの区別が自分の中で判然としなくなることもあるようだ。「日本ではどうしていたか，よく覚えていない」（日本人）という人もいる。また，「あなたなら，というのとフランス人なら，というのは同じ質問の繰り返しでしょう」（フランス人）という人もいれば，考えた末に「日本にいる私としては，～です」（フランス人）のように，常に前置きを付けて答える人もいる。前者の場合には，おそらく日本で暮らしていても，自分がもともと持っている行動パターンをあまり変えていないのだろうと推測される。この場合，自分＝フランス人というところは疑われておらず，後者の場合には，フランスにいる自分と日本にいる自分が違うことを明らかに意識している。

「私の意見は，ぜんぜん違います」
――回答の姿勢

この調査では，特にインフォーマントの数を一度に何人で，と決めているわけではない。場合によっては，３人位のグループの方が話が盛り上がっていいという場合もあるが，複数での調査の場合，日本人・フランス人でまったく反対の意味で問題になる点がある。

日本人同士では，その場の全体的な調和のようなものが重要視されるあまり，個別の意見がいいづらくなることがあるようだ。１人が答えると皆がそれに同意するということに，ともするとなりかねない。フランス人の場合には，逆に独自の答をしようと意識するために，調査に影響を及ぼすということがある。

特に男性複数での調査では，いかに自分が独自の意見をもっているか，独自の存在であるかを示そうとするあまり，意識的に一方の人と違うことをいうことがあるように思われる。サービス精神ということもあるのかもしれないが，他の人と同じ意見ならいう必要はない，いいたくないという考えが根強いらしい。他の人がどういおうと，あなた個人の感じたままをいえばいいのです，といっても，どうも収まりが悪いらしく，「私の意見は，ぜんぜん違います」ということになる。自分の考えと全く別のことをいうというわけでもないようだが，とにかく一方の人とは違っていることを強調しながらコメントする傾向がある。

このことについて，あるインフォーマントは，「あらゆる角度から重箱の隅をつつくのです」といった。結局，フランス人調査の場合には，こうした弊害の可能性がわかってきたため，調査者との１対１の調査が多くなった。女性の場合にはこの傾向は，少なくとも調査時には表に出てこなかったが，やはりやりづらいと感じる人も多いようで，「同席者に影響されては困るので，１対１の調査にしてほしい」と依頼の段階でいわれたことも何度かあった。

「要求する時は，貴婦人の態度，身なりで」
――ビデオ調査の利点

この調査では，刺激として日本のドラマをも

とにしたビデオを用いたことにより，口頭説明形式の調査では得られない貴重なコメントが得られている。

パスポートの再発行を依頼する調査場面では，依頼をしている男性の様子・表情に関して，フランス人は，「ビデオの男性ほど心配そうな顔はしない」「フランスでは困った顔はしないし，汗もかかない」「（日本人のように）当たりを柔らかくするために微笑むこともない」といい，一方，日本人には「フランス人は悪びれない。態度だけでも済まなそうにすればいいのに厚かましい」「日本人は小さくなるが，フランス人は小さくならない」「へりくだるとこちらのいうことを聞いてくれない」「フランスでは態度ではなく，ことばで相手を説得する」というコメントが見られる。

また，同じの場面で，別の男性が割り込んでくるというところでも「割り込んだ人の方が，きちんとした，いい服装をしているから社会的立場も年齢も上。だから割り込まれた人は譲るだろう」（フランス人）「フランスで何か要求する時には，まず身なりをきちんとして，貴婦人のような態度で接するようにしている。そうでないと要求が通らない」（日本人）というような，身なりに注目しての回答もあった。

「人によるし，気分にもよります」
――反応の幅

調査の中では，日本人・フランス人ともに「フランスでは，（反応の仕方は）人による」というコメントが多く聞かれた。文化的にも言語的にも多様性を持った社会では、人によるばらつきが多くなるのは当然のことであろう。パスポートの再発行の依頼場面では，「フランスなら，まず（そのことをやってくれそうな）係の人を選ぶ」というコメントが，日本人・フランス人ともに見られる。いい人に当たった場合には，案外融通がきく反面，受け付けない人なら，どうやってもまったくだめというように，個人差が大きいということのようだ。

また，興味深いのは，割り込みを許すかどうか，廊下でぶつかられた時はどう反応するか，という質問に対して，フランス人では，「相手がどんな人かによる」という反応に加えて「（自分の）気分による」という回答が見られたことである。日本では，受け答えのスタンダードがある程度決まっているということも，この調査の中でしばしば指摘されているが，フランスでは社会的多様性に加えて，独自のやり方が重視される分，対応にも幅が出るということらしい。また，割り込みについても「割り込む人の説明が納得できれば譲る」というコメントに見られるように，その場次第，相手次第で変わりうる部分が日本の場合よりはるかにありそうである。このことはまた「フランスでは，ぶつかりや割り込みがきっかけで会話が始まることもある」（日本人）というコメントとも関係する。

ところで，ここで個人差といわれているものは，年齢や性別等々の要素によってどの位まで分析できるのだろうか。また，気分とは何を指すのか。これについては，今後検討していきたい。

「あなた，降りますか？」「いいえ」
――察し

廊下でぶつかるという場面で，日本人から，「フランスでは，地下鉄などで足を通路に大きく伸ばしている人がいる。声をかければ引っ込めるのだが，それまではまったく気にしていない」というコメントがあったが，フランスに行くと，実際の体験として確かにそういうところがあると感じられる。また，これに関連して次のようなこともあった。

調査の会場となったある大学でのこと。夕刻から始まる調査のために，教室の廊下のベンチに座ってインフォーマントを待っていた。すると反対側の廊下の端で、いきなり電気を消した人がいた。廊下には，筆者ともう一人，人がいたのにもかかわらずである。「人がいること位，見ればわかりそうなのに，意地悪としか思えない」と感じて，嫌な気持ちになった。ところがフランス在住３０年～４０年になるインフォーマントの日本人女性２人にその話をすると，「それは，人がいるということに気がついていないのだ。いつも電気を消すようにうるさくいっているから，気を利かせたつもりなのだろう。そういうときは大きな声で、「消さないで！ここに人がいます!」というのがフランス人。きっと向こうは恐縮して謝る」と口を揃えていう。筆者の感覚だと，電気を消す前に他に人がいないか確認しなかったとは考えられない，わかっていてわざと消したのではと勘ぐりたくなってしまう。これについては，後日，別の在仏日本人にも尋ねてみたが，インフォーマントの女性達とまったく同じ分析をした。

似たような例が，調査の中でも報告されている。

「地下鉄やバスの中で，降りる際に,『あなた，降りますか？』と声をかけると『いいえ』という。声をかけているのだから，こちらが降りることはわかっているはずなのに，フランス人はわざとそのまま動かない。」（日本人）

このことは，いわゆる「察し」がどの位行われるか，さらには，行動のレベルでどの位他人を気にするかというところと関わってくる。このことはまた，どの位はっきりとことばによってコミュニケートするかということと表裏をなすことであろう。

調査での筆者自身の経験を中心に，今の時点での印象を述べた。これらのことは調査項目に直接関わることではないものの，今後データを分析，検討していく際にも留意する必要があると考えている。

Ⅷ. ビデオ刺激調査雑感

池田　理恵子

この調査で、アメリカに住む日本人、日本に住むアメリカ人、フランス人、ブラジル人、そして、ベトナムに住む日本人に面接質問してきた。これはこの調査研究が対象とする地域・人の組み合わせの半分にあたる。それぞれにいろいろな回答やコメントが得られた。

調査はグループ調査なので、調査者・同席者の計２名（時には調査者１人の時もある）に対して、被調査者が１名～３名（他の調査者は４名、５名を相手にしたこともあるが私はない)。録音状態を確認し、質問し、ビデオを操作し、質問し、調査票にメモをとり....と忙しい。録音テープはあっても安心してはいけない。実際の調査場面では気が付かなくても、いざ文字化にとりかかると、被調査者の声が非常に似ていて判別しにくいとか、通りの車の音がうるさくて声がかき消されそうになるとか、いろいろなことが起きる。その場でメモをとっておくことでヒントになるし、音として残らないうなずきや身振りが記録される。

この調査は、出身地域の言語行動と現住地域のそれとを対比させながら回答してもらう、言語行動についての意識調査である。回答を求められる意識のあり方は多岐にわたる。ふだん自分自身がどのようにふるまっているかという言語行動のイメージや、所属する言語文化社会ではどのようにふるまうべきかというステレオタイプ、それぞれの言語文化社会で期待される言語行動、その言語行動についての評価のあり方等である。

録音調査資料はデータベースの形で蓄積されつつあり、地域だけでなく、性別、年齢、現住地域居住年数、在外年数等の要因によって分析することも可能だろう。そのような分析はこれからにゆだね、ここでは、言語意識調査で得られた回答の中から、数としては少ないが、興味深い意見・意識を取り上げて、その意味を考えてみたい。

順番はあるか？

言語機能として割り込み／応対を扱っている場面がある。役所の窓口で順番の割り込みをする／されるという場合、割り込みをするならどのようにするか、割り込まれたらどう応対するか、窓口の人はどのように応対するか、について尋ねている。ベトナム在住日本人の当地の言語行動についてのコメントは興味深い。

> 急いでいる場合は自分も横から入らないと何も進まない。何も言わずに入る。周りの人は関係なく、担当者に対して話し掛ける。ベトナムでは一列に並ばない。列という形態がない。
>
> （在ベトナム日本人・男・ 22 歳・ 11 ヶ月）

> ベトナムでは、横から入り込んできたとしても、最初に話をしていた人と横から入り込んできた人とがそれぞれ係の人と話をする。横の関係はなく、係の人との１対１の関係である。
>
> （在ベトナム日本人・男・ 42 歳・ 5 年）

調査場面として「割り込み」を設定していたが、それは、順番がきちんとあって列を作っていることを前提としたものだった。他の地域では、横から入り込むか、順番を守るかということが意識されているのに対して、ベトナムでは、係の人へと続く列という形態でなく、係の人から放射状に位置づけられる依頼する人たちという形でとらえられるという。同じように思える状況・場面をどのような言語行動が必要な場面と認識するか、そこでどのような言語行動をとるべきか、ということを調査する意義を改めて感じたコメントだった。

関係はどのように修復されるか？

謝ることと謝らないこと

人と人との関係において均衡がくずれたとき、その関係を修復しようとして謝罪が行われる。調査では、謝罪に関する場面が２つある。

ビルの廊下で、自分が急いでいたせいで、見知らぬ他人に肩をぶつけてしまった場面（ビデオの中では、ぶつかられた方が先に叱責をし、それに応えてぶつかった方が詫びている）は、どの地域でも謝罪を必要とする場面として認識されるだろうか。調査が完了していないこともあり、すべての地域について回答が得られてはいないが、その中で、通常の言語行動として謝罪しないという回答は、ベトナム、韓国の言語行動イメージに多そうだ。例えば、

> ぶつかられた人は映像と同タイミングで「何ヲヤッテイルノカ。注意シロ。」と言う。ベトナムの方がきつい。ぶつかった方は謝らない。
> （在ベトナム日本人・男・ 28 歳・ 11 ヶ月）

また、役所の窓口でパスポートの再発行を依頼する場面は、パスポートをなくしたのが自分の不注意で申し訳ないと詫びることが必要ととらえられるだろうか。全般的な地域ごとの傾向はひとまず置くこととして、ベトナムでは、ぶつかる場面同様に謝らないという回答が多くみられた。例えば、

> 一般のベトナム人同士の場合は「お前の方が悪いんだろう。」というように切れる。しかし、役所の場合は依頼をする方が圧倒的に弱く、そのようにやると 100%負けることがわかっているので、下手に出て「今回だけわかってよ。これこれの状況なので私の難しい立場をわかってよ。」というようなアプローチをするだろう。その場合でも自分のミスを謝ることはしない。
> （在ベトナム日本人・男・ 22 歳・ 11 ヶ月）

ベトナム在住日本人からみた、ベトナムではこうしているようだという言語遂行イメージではあるが、これらの回答からは、この２場面では謝罪が必要であると認識されていないようにみえる。ここで、なぜ謝罪がなされないのかについて、おもしろいコメントが得られた。

> ベトナム人同士の間で接触事故があってもよほど大きなことでない限り、話し合ったりスミマセンと言ったりしない。言葉を交わさない。一言でも発したらどちらが良い悪いは別として、延々と、大事になる。少々部品が壊れようと何も言わず黙っている。以前、子供同士の些細な喧嘩が（言葉を発したことで）２ブロックを巻き込んだ大喧嘩になったことがある。余分なことはしない。言わない事で物事を収めようとする。言い出すと、責任を認めないし、プライドが高く、相手に責任を押し付けて、大事になることがわかっているので、何も言わないようにする。
> （在ベトナム日本人・男・ 42 歳・ 5 年）

これは、ぶつかることで当事者間の均衡が損なわれたとしても、言葉を発しないことで関係をそれ以上損なわないようにしよう、それによって修復しようという方策をとっているという見方である。謝罪があるかないかということは言語行動様式の異なりであり、文化摩擦や誤解につながる可能性を含んでいるが、どちらのやり方も当事者間の関係の不均衡を修復しようとすることの現れとみることはできないだろうか。

距離はどのくらい？

ベトナムにおける人と人との物理的距離と心理的対人距離の取り方についても面白いコメントがあった。言葉そのものというわけではないが、摩擦につながる可能性のあることがらである。

> 親しくなると身内感覚で甘えが生じてわがままになる。長期で使ったホテルの従業員が親しくなるにしたがってサービスが落ちた。店の人と親しくなると値段をまけてくれなくなった。親しいんだから儲けさせてくれということのようだ。親しくなると礼を言わなくなって驚く。
> （在ベトナム日本人・女・ 26 歳・ 7 ヶ月）
> 親しくなると図々しくなる。突然家へ遊びに来たりする。一人で出かけようとすると寂しいだろうと一緒に付いてくる。手をつないでくる。
> （在ベトナム日本人・女・ 21 歳・ 7 ヶ月）

心理的距離のとりかたとその縮めかたの速さが違和感を生むことにつながるようだが、ベトナム人は物理的な距離が日本人に比べて短いということ、これは心理的な距離と関係があるのだろうか。ベトナム人の自己意識はどのような構造をもつのか。在日ベトナム人の調査の後、併せて考えてみたい。

外国人と（して）のコミュニケーション

調査で得られた意見の中に、現住地域において、外国人としてどのように振る舞うか、現地の人とどのようにコミュニケーションをとるか、どこまで現地の言語行動様式に合わせるか、という点についてのコメントがあった。

> 外国人とベトナム人が接触事故を起こした場合､周りにいるベトナム人が外国人に対して、早く謝れと言う。外国人の場合、ことを早く収めるためには謝った方がよい。ベトナム人同士の場合は絶対謝らない。
> （在ベトナム日本人・男・ 42 歳・ 5 年）

これは、外国人の場合、現住地域の言語行動様式をとらないことによって事態をうまく収拾できるということだろうか。しかし、現住地域の人のウチに入ると、また別の方策を身につけることが要求されるようだ。

> 日本人はスミマセンとよく謝るが、ベトナム人との間に擬似家族の関係ができていると、ベトナム人からなぜそんなに謝るんだ、水臭いと言われる。
> （在ベトナム日本人・男・ 42 歳・ 5 年）

どのような要素からどんな過程で対人距離が計られ、それによってどのような言語行動様式をとることが必要であるかを明らかにしていくことが必要だろう。

上記の２つのコメントは、現住地域の人から被調査者が言われることだが、逆に、被調査者が自分自身で、外国人としての言語行動をとっているという意識も収集されている。これは、日本に住む外国人、外国に住む日本人の両方からコメントがある。例えば、割り込みをするか、横から入り込むかということについて、以下のような意見がある。

> 日本人が入る場合は平気だが、外国人が入る場合はあつかましいと思われるだろう。
> （在日アメリカ人・ 24 歳･女・ 2 年 3 ヶ月）
> 日本の役所の窓口で、自分がずいぶん急いでいるような場合でも、外国人は目立つから我慢する。
> （在日アメリカ人・ 26 歳・男・ 3 年）
> 日本の役所の窓口で自分が係の人と話しているところへ横から入り込まれたとしたら、「どうぞお先に」と言って順番を譲る。それは、自分が外人で特別だから。
> （在日アメリカ人・ 27 歳・男・ 3 年）

また、ぶつかった場合の言語行動についての意見もある。

> 普通のフランス人だったら簡単な言葉で謝ると思うが、自分は外国人なので常に相手に対する恐怖感がある。向こうから来る相手を見て簡単な言葉で謝るか、少し丁寧な言葉で謝るかを選ぶが、少し丁寧な言葉で謝っておけばあたりさわりがない。
> （在フランス日本人・ 39 歳・女・ 7 年 6 ヶ月）
> 簡単な言葉で謝る。止まると問題になるという気持ちがある。相手を恥ずかしくさせる。特に外国人なので。
> （在日アメリカ人）
> ビルの廊下で見ず知らずの人に体をぶつけてしまった場合、少し丁寧な言葉で謝る。自分が日本ではお客さんという感じがするから、自分の国よりももっと謝る必要がある。
> （在日アメリカ人）

ここに挙げたコメントは、出身地域の言語行動様式と、現住地域のそれとを把握したとしても、その上で、実際の言語接触場面において、どのように言語行動様式を調整するかという問題が存在することをうかがわせる。このような調整について、発音、語彙、文法等の言語レベルの場合、抵抗は少ないかもしれない。しかし、社会文化的言語行動について自分のルールをかえることは難しいだろう。ここで挙げたコメントは、外国人だからこそ調整のつまみを余計に回す必要があるという意識である。他方、自分の考え方、見方、行動を変えることは、自分のアイデンティティーを変えることにもなるからと、調整を少なく抑えよう、あるいは、つまみを回さないというコメントも多く集まっている。言語行動様式、社会文化的行動に関する能力を習得し、その上で、どこまで自分を変えるかということは、これからの異文化コミュニケーションを考える上で重要な問題だろう。

以上、調査で得られたコメントの中から、数として多くはないが、興味深いものを取り上げた。これらのコメントを心に留めながら、他の設問の回答から導き出されるだろう、言語行動様式を選択する際の諸要因の分析・考察を進めていきたい。